

# 学習意欲を高める国語科指導の在り方

－「見通し」を立てることの視点から－

研究指導主事 松本吉央

Matsumoto Yoshio

## 要 旨

現在の教育的課題の一つは、子どもたちの学習意欲が低下していることである。従来から意欲を高めるために、内発的動機付けが重視されてきた。しかし、学習の興味・関心を高めるだけにとどまり、自ら学ぼうとする意欲まで高めきれていないという現状がある。学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、「見通し」を立てるという視点から学習意欲を高める国語科指導の在り方を考察した。

キーワード： 学習意欲、学習指導要領の改訂、「見通し」を立てる

## 1 はじめに

現在、各調査結果から子どもたちの学習意欲の低下が指摘され、大きな課題となっている。速水敏彦氏は、「全国の教師たちは、子どもたちが楽しく学ぶ方法を追求してきた。しかし、今日、学力低下や学習時間の減少が取りざたされているように内発的動機づけという魔法の杖だけでは、十分功を奏しなかったことも認めざるをえない。」「一時的に子どもの気持ちを盛り上げるだけでなく、『わかる』『できる』という自信と結びつかなくては本当の意味で学習意欲になっているとはいえない。」(2008)と指摘する。さらに、「内発的動機付けの真価は授業中の感動がどれほど深いか、あるいはどれほど拡張されるかにかかっているとみえる。」「学習の魅力や価値は単に教材や教示の工夫だけによるものではな」と述べる。つまり、内発的動機付けを「深化」「拡張」する取組であれば「本当の意味での学習意欲」の育成につながる可能性があるということになる。そこで、自ら学ぼうとする意欲を育成することにつながる学習するにはどうすればよいのか、「見通し」を立てるという視点から考察する。

## 2 研究目的

小学校における学習意欲を高める国語科指導の在り方について考察をする。

## 3 研究方法

- (1) 各調査から見てきた国語に対する意欲面の課題について考察する。
- (2) 学習意欲にかかわる学習指導要領改訂の要点について考察する。
- (3) 「見通し」を立てるという視点から、学習意欲を高める国語科指導の在り方を考察する。

## 4 研究内容と考察

### (1) 各調査結果から見てきた国語に対する意欲面での課題

『学力』は比較的よいが、勉強が好きと思っている児童生徒の割合が低い。」と、平成20年10月23日、奈良県内に教育委員長アピールが出された。これは、平成19、20年度の全国学力・学習状況調査の学力調査と児童、生徒質問紙調査の結果を基に出されたものである。国

語、算数・数学に関する学力調査の奈良県平均は2年連続で全国平均を上回ったが、「国語の勉強は好きですか」等の学習意欲にかかわる調査結果は、2年続けて全国平均を下回る数値が目立った。平成16、17年度に県独自で行われた「奈良県児童生徒学習到達度調査」の数値と比べても、中学校での伸びは見受けられるが、全国平均を下回っている点やほぼ半数の児童生徒しか意欲的でないという点から、安閑とできる数値ではない。「国語の勉強は大切だと思いますか」の質問項目で「思う、どちらかといえば思う」と答えた数値が80%を超えていることと合わせ

**表1 奈良県の児童生徒の国語に関する意識調査の結果 (※1)**

ると、奈良県の児童生徒は、勉強は大切だと思って取り組み、学習内容をほぼ理解しているが、「自ら進んで学習する意欲がもてていない」ということになる。国語を含めた、学

		H20	H19	H17	H16
国語の勉強は好きですか (「好き、どちらかといえば好き」と答えた児童生徒の割合)(%) ※<>内は全国平均	小	56.4 <56.1>	58.7 <59.6>		51.2
	中	50.9 <55.2>	52.9 <56.8>	39.0	
国語の勉強は大切だと思いますか (「思う、どちらかといえば思う」と答えた児童生徒の割合)(%) ※<>内は全国平均	小	89.1 <89.4>	89.8 <91.1>		88.0
	中	84.7 <87.3>	88.6 <89.9>	79.3	

習全般にかかわる意欲の低下は、奈良県だけではなく、文部科学省の「教育課程実施状況調査」、藤沢市の「学習意識調査」等で以前から指摘され続け、数十年来の全国的な課題となっている。平成元年度版の学習指導要領の改訂で、「関心・意欲・態度」が観点の一番に位置付けられたことや、現行

**表2 藤沢市教育センター「学力意識調査」より (※2)**

の学習指導要領で学習意欲の向上を「生きる力」の理念の一つとしたのは、このことと大きくかわる。しかし、学習意欲の低下傾向が大きく改善されないまま、PISA調査や理数教科対象のTIMSSの国際的な調査結果等からも改めて課題として指摘され、全国学力・学習状況調査でさらに確認されたのである。

	「もっとたくさん勉強したいと思 いますか。」の質問に、「もっとし たい。」と答えた生徒の割合(%)	「学校から帰ってから勉強しま すか。」の質問に、「毎日2時間以上 する。」と答えた生徒の割合(%)
1965	65.1	20.8
1970	58.7	22.4
1975	45.9	29.1
1980	43.4	17.0
1985	37.2	23.8
1990	36.9	18.6
1995	31.4	17.0
2000	23.8	13.8
2005	24.8	7.8

(対象：中学校第3学年、5年ごとに同一内容の質問紙での調査。)

## (2) 学習意欲にかかわる学習指導要領の改訂の要点について

社会の急激な変化、子どもたちの実態を踏まえ、これからの教育の充実に向けて、平成18年12月、施行から60年を経て教育基本法、学校教育法等が改正された。そこで、「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」(学校教育法 第30条2)と、学習意欲が学力の重要な要素の一つとして規定された。このことを受けて、総則第4の2(4)に、自主的に学ぶ態度を

はぐくむために、「児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。」という文言が入り、国語科改訂のポイントの一つである「自ら学び、課題を解決していく能力の育成を重視し、指導事項については学習過程を明確化した」ことに関連していく。つまり、単元全体を見通した学習によって学習意欲を育成するという方向性が示されているのである。『小学校学習指導要領解説国語編』（2008）には「書くことの課題を決める指導事項や、書いたものを交流する指導事項などを新設し、学習過程全体が分かるように内容を構成している。」とあり、自主的に学ぶ態度をはぐくむためには、見通しをもった学習、自らを振り返る活動が大切であるとされている。そこで、「見通し」を立てていく学習に焦点を当てて考察する。

### (3) 「見通し」を立てるといふ視点からの学習意欲を高める国語科指導の在り方

#### ア 指導過程の比較

広辞苑によれば、「見通す」は「始めから終わりまで目をとおす。」とあり、「見通し」は、「問題の全体構造を把握して解決を図ること。」とある。つまり、「見通し」を立てるとは、単元全体を見渡し、どのような学習をするのか子ども自身が把握するということになる。今回は、四つの指導過程や事象、モデルの比較を通して、「見通し」を立てる学習の在り方を探る。

国語科の目標では、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し」と、まず「表現」が意識され、PISA調査の「読解力」でも、情報を読み取るだけでなく、自分の考えを表現することまで意識されている。そこで、興水実氏が提案した「話し方の基本的指導課程」と、それを基に高橋俊三氏が提案した「話すことの基本的指導課程」という「話すこと」の指導過程を取り上げた。あと二つは、関心・意欲を高めるということで、「自ら学ぶ」、「動機付け」の視点から、鈴木克明氏の『教材設計マニュアル 独学を支援するために』で紹介されている「授業や教材を構成する指導過程を学びを支援するための外側からのはたらきかけをするという視点」でとらえた『ガニエの9教授事象』(Robert M. Gagne)と「学習意欲を高める手立てを四つの側面に分けて考え」られた『ケラーのARCS動機付けモデル』(John M. Keller)を取り上げた。

表3 四つの指導過程等の比較検討

	興水実：話し方の基本的指導課程	高橋俊三：話すことの基本的指導課程	ガニエ：9教授事象	ケラー：ARCS動機付けモデル
導入（前半）		①意欲の喚起（と方法の理解）	①学習者の注意を喚起する。	○注意 Attention （知覚的喚起、探求心の喚起、変化性） 「おもしろそうだな」
（後半）	①学習の準備計画を立てる。 ②モデルの学習、あるいは似た事例の学習 ③基準の確立	①（意欲の喚起と）方法の理解 ②話題の決定	②授業の目標を知らせる。 ③前提条件を思い出させる。 ④新しい事項を提示する。 ⑤学習の指針を与える。	○関連性 Relevance （親しみやすさ、目的指向性、動機との一致） 「役立ちそうだな」 ○自信 Confidence （学習要求<評価の基準の提示>）
展開	④めいめいの実践 ⑤グループの評価	③情報の収集と選択・提示物の準備 ④話の組立と修辞の検討 ⑤グループごとの発表検討	⑥練習の機会をつくる。 ⑦フィードバックを与える。	○自信 Confidence （成功の機会、コントロールの個人化） 「やればできそうだな」
まとめ	⑥もう一度、じょうずにやってみる。部分の修正をする。	⑥クラス全体での発表 ⑦評価	⑧学習の成果を評価する。 ⑨保持と転移を高める。	○満足感 Satisfaction （自然の結果、肯定的な結果、公平さ） 「やってよかったな」

「見通し」を立てる視点から、一般的な「導入・展開・まとめ」の三つの過程を基に比較

した。導入を、「意欲を喚起したり、見通しをもつ」段階ととらえ、主に意欲を喚起する前半と見通しをもつ後半に分けた。展開は、「計画を基に学習を進める」段階、まとめは、「学習の成果を表現し、評価する」段階と考えた。なお、三つの過程でとらえたため、高橋氏の「意欲の喚起と方法の理解」の過程、ケラー氏の「自信 (Confidence)」の事象を分割した。

## イ 「見通し」を立てる導入段階の学習のポイント

四つを比較すると、まず、面白そうな教材と出合わせ意欲を喚起し、次に、評価規準等を明らかにして学習の指針を与えているのが見えてくる。上記の表を基に、「見通し」をもたせる過程の学習のポイントとして、①意欲を喚起する教材を提示する、②単元の目標を示す、③学習の指針をもたせる、という3点を挙げ、考察していく。

### (7) 「面白そうだな」と意欲を喚起する教材との出会い

意欲的な学びには、やはり、「面白そうだな」と興味・関心をもたせる教材、意欲を喚起し、内発的動機付けを促す教材との出会いが必要であると考えられる。意欲を喚起する教材を、辰野千壽氏(2006)の分析を参考に、下記のような教材であるにとらえる。

- ・面白そうだと思う教材 (言葉自体の面白さ、内容の面白さ、意外性等)
  - ・自分と関係があると思う教材 (発達段階に即している、日常生活とかかわる等)
  - ・学びを拡張することができる教材 (以前の経験等を基にやれると思える、発展性がある等)
- このことを、「擬声語・擬態語」を教材例として具体的に述べる。

擬声語 (または擬音語) とは、物の音や声を真似て表した言葉、擬態語は、生き物の動作や様態、物事の状態や様子、人の心理状態を真似て表した言葉である。

擬声語・擬態語は、『くるくる回る』、『しくしく痛む』、『さらさら流れる』と言われれば、その発音体感が共通のイメージを与えてくれて、誰もがほぼ同じように腑に落ちるのである。初めて聞く擬態語でも、おおよそ共通の概念を抱く。(黒川伊保子2007) ことができる言葉であるが、「そもそも日本人にとって、擬音語・擬態語というのは、そんなに自明の言語なののでしょうか? 『こけこっこー』という鶏の声一つとりあげても、われわれ現代人の知らないことがたくさんあります。」(山口仲美2003) といわれる言葉でもある。つまり、分かっているようでも分かっていない意外性のある言葉なのである。日常生活や絵本などで、子どもたちは擬声語・擬態語に触れ、身近に感じるとともに、鶏は「コケコッコー」と鳴くなどと固定観念をもっている。そこへ、江戸時代には「東天紅 (とーてんこー)」と表されていたことや英語圏の人は「コックワドゥードゥルドゥー」と表現することなど、時代や言語の音節によってとらえ方が異なるという事実が示されると、固定概念が崩れ、強く関心をもつ教材となる。

また、会話や日常生活の中、教科書、絵本、マンガ等で探していくと、低学年児童でも、容易に擬声語・擬態語を見付けることができる。特に、絵本では、擬音語・擬態語が効果的に使用されており、改めて言葉の面白さに気付くことができる。擬声語・擬態語の理解により、「ごんぎつね」で、『兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。』の『ふみふみ行った』ときのごんの気持ちを考えよう」などと、文章をより深く読解していくことにつながる。

- ・擬声語・擬態語を集め、分類することによって、意味による語句のまとまりをつくり、語彙の拡充につなげる。
- ・「ころころ」と「ごろごろ」、「トントン」と「ドンドン」の意味の違いを考えることにより、言語感覚を養う。

- ・自分のオリジナルな擬声語・擬態語をつくったり、擬音語・擬態語を使った詩や俳句づくりを通して、「書くこと」の力の育成につなげる。
  - ・擬声語・擬態語のクイズ大会等をし、「話すこと・聞くこと」の力を育成する。
- 等、擬声語・擬態語は、学習を拡張していくことができる教材である。

このように、子どもが面白そうだと感じ、自分と関係があると思えるかどうか、学びを拡張していけるかどうかという視点で教材をとらえ直して、子どもたちと出合わせたい。

#### (イ) 「やりたいな」と思える単元の達成目標（ゴール）の提示

見通しをもたせるためには、やりがいを感じさせる課題を、行動の目標となるゴールを提示することが重要である。

例えば、擬音語・擬態語を教材としたとき、下級生に楽しい絵本の読み聞かせや擬声語・擬態語クイズをしたり、お年寄りの人たちと言葉の交流会をしたりするなど、人とのかかわりにおいて認められる機会を設定することが考えられる。『授業を変える 認知心理学のさらなる挑戦』には、「学習に社会的な意義をもたせることによっても、学習意欲を高めることができる。とくに、他者のために役立っているのだという気持ちをもたせることは、非常に効果的である (Schwartz et al., 1999)。」、「学習意欲は、とりわけ地域社会に貢献していると感じることができるときに高まるようである (McCombs, 1996 ; Pintrich and Schunk, 1996)。」とある。人とのかかわりにおいて認められる機会を設定すれば、単元を通してのモチベーションとなりうる。そして、そこで「うまくできた」「成功した」という成功感を味わうことができれば、「自己効力感や自己有能感を持ち、意欲が高まる」と辰野氏(2006)も述べている。さらに、一つの成功体験が、次の取組の意欲にもつながっていくのである。その際には、課題を指導者が示し、強引に進めていくのではなく、子どもたち自身の課題となるよう、意図や意義が納得できる丁寧な話し合い等の過程を踏まえたい。

#### (ウ) 「やれそうだ」と思える学びの視点の共通理解

どのような学習をするのか、どのような力を付けるのか、指導者と子どもたちが話し合い、共通理解ができるようにしたい。「こうしなさい。こんな力を付けなさい。」と指導者が一方的に提示をすれば時間的には効率的だが、それでは自ら学ぶ力を育てることにつながる自らの「見通し」を立てることにはならないと考える。発達段階や学年の指導事項を踏まえ、子どもたちの気付きとすり合わせ、共につくっていくようにしたい。

例えば、「分かりやすい話し方」のモデルを示したり、「分かりやすい話し方」と「分かりにくい話し方」の対比事例を学習に取り入れれたりして、どうすれば分かりやすい話し方ができるのか、どのような力を身に付ければよいのかを子どもたちに気付かせ、学びの視点を明確にする学習を取り入れたい。「生徒は、対比事例を経験することによって、以前には気づけなかったことに気づいたり、既有知識と新しい知識がどのように関係しているかを理解できるようになる (Bransford et al., 1989 ; Schwartz et al., 1999)。」とあるように、いい例を二つ、いい例と悪い例、特徴的な二つの例など、対比事例を示すのは効果的である。

モデルを示すためには、まず指導者が、この単元で育成する力や分かりやすい話し方のポイント等を明確に把握しなければならない。そして、それに即したモデルを示し、子どもたちと指導者で学ぶ視点を共通理解していくのである。そこで気付いたことは、単元を通しての評価の「見通し」ともなる。評価の観点が決まるので、指導者は的確なアドバイスができ、子どもたちも納得して受け入れられる。具体的に指摘されるので、認められたときには自信

がもてる。指導者のアドバイスが、抽象的であったり、同じことの繰り返しであれば、子どもたちの意欲は当然低下していくであろう。「成功した」と思える体験まで到達するためには、その過程で繰り返し練習することが大切になる。つまづいて意欲が低下するときもあるが、そこを乗り越える支えとなるのは、共通理解した視点による具体的な指摘と励ましではないだろうか。どのような力が必要なのか、どのような力が付いたのかを自覚し、グループでも相互評価できるように、視点を明確にもたせる取組が重要となる。

子どもたちがいかに明確な「見通し」を立てられるかが、内発的動機付けの拡張につながり、学習意欲を高められる学習となるかどうかのポイントではないかと考える。

## 5 おわりに

今回は、「見通し」を立てるという視点から学習意欲を高める国語科指導について考察した。落語や漫才で「つかみ」が大事と言われるとおり、まず、意欲を喚起することが重要である。そして、それを基に明確な「見通し」をもたせ、繰り返し取り組んで成長を実感できるような学習活動をさせることによって、自ら学ぶ意欲の向上につながっていく。好き勝手にさせることや、放任することで育成されるのではなく、より綿密な、計画的な指導によって育成されるのではないかと考える。また、学習指導の充実だけで学習意欲の向上が図れるとは考えていない。家庭での基本的な生活習慣の確立、地域社会との連携、教室の学習規律の確立、学級の人間関係の構築など総合的な取組が必要であるのは言うまでもない。それぞれの観点からより充実したアプローチをし、子どもたちの自ら学ぶ意欲を高められるようにしていきたい。

## 参考・引用文献

- (1) 速水敏彦 (2008.7) 『児童心理』 No.880 「学習意欲を高めるー子どもが学習に魅力や価値を感じるとき」 金子書房 p p 3-8
- (2) 濱上和康 (2008.10.23) 「教育委員長アピールー「全国学力・学習状況調査」等の結果を踏まえてー」
- (3) 国立教育政策研究所(2007) 「平成19年度全国学力・学習状況調査 調査結果について」  
[http://www.nier.go.jp/tyousakekka/3hp\\_tyousano\\_kekka.htm](http://www.nier.go.jp/tyousakekka/3hp_tyousano_kekka.htm) ※1
- (4) 国立教育政策研究所(2008) 「平成20年度全国学力・学習状況調査 報告書・集計結果について」  
<http://www.nier.go.jp/08chousakekkahoukoku/index.htm> ※1
- (5) 奈良県教育委員会(2004) 『平成16年度奈良県児童生徒学習到達度調査ー小学校ー報告書』 ※1
- (6) 奈良県教育委員会(2005) 『平成17年度奈良県児童生徒学習到達度調査ー中学校ー報告書』 ※1
- (7) 藤沢市教育センター(2005) 『第9回「学習意識調査」報告書』 ※2
- (8) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 総則編』 東洋館出版 p 58
- (9) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 国語編』 東洋館出版 p 7
- (10) 新村出 編(2008) 『広辞苑第六版』 岩波書店 p 2703
- (11) 国語教育研究所 編(1991) 『国語教育研究大辞典』 明治図書 p 173
- (12) 高橋俊三 編(1999) 『音声言語指導大事典』 明治図書 p 120
- (13) 鈴木克明 著(2002) 『教材設計マニュアル 独学を支援するために』 北大路書房 p 79
- (14) 辰野千壽 著(2006) 『学び方の科学』 図書文化 p 65, 67
- (15) 米国学術研究推進会議 編著 森敏昭・秋田喜代美 監訳 21世紀の認知心理学を創る会 訳 (2002) 『授業を変える 認知心理学のさらなる挑戦』 北大路書房 p p 60-61
- (16) 黒川伊保子 著(2007) 『日本語はなぜ美しいのか』 集英社新書 p 108
- (17) 山口仲美 編(2003) 『擬音・擬態語辞典』 講談社 p 2, 99